

0. はじめに

英語には、次のような ‘Why+is+it+(that)’ および ‘How+is+it+(that)’ の連鎖をもつ疑問文(以後、それぞれ Why is it 疑問文、How is it 疑問文と呼ぶ)が存在する。<sup>1</sup>

- (1) a. *Why is it that* I find chocolate so addictive?—*CIDE*  
b. *Why is it that* children seem to grow up so fast and leave home so slowly?—*Reader’s Digest*, March 1991
- (2) a. “*How is it that* you have come from over there?” he asked.  
(...) “I live there,” she replied.—*TIME*, April 1, 1996  
b. And oh, my poor hands, *how is it* I can’t see you?—L. Carroll, *Alice in Wonderland*

これらの疑問文は、次に示すように埋め込み文として生じることでもある。

- (3) (...) but we can profitably ask *why it is that* they suffer depression at less than one-fifth the rate of people in nearby Baltimore.—*TIME*, Aug. 28, 1995
- (4) We shall then, also, see *how it is that* the breeds so often have a somewhat monstrous character.—C. Darwin, *Origin of the Species*

Why/How is it 疑問文は談話で頻用される言語表現であるにもかかわらず、これまでの研究ではその特性の詳細について十分に検討されていないように思われる。本稿では、広範囲な言語資料を分析の対象としながら、Why/How is it 疑問文の意味的特性及び談話機能を実証的に明らかにする。<sup>2</sup>

1. 従来の研究

Why/How is it 疑問文に早くに着目し、実証的な分析を試みた安藤(1969)

の議論を手がかりにして、従来の研究の問題点を概観しておきたい。安藤(1969)では、各疑問文の意味的特性について次のように分析されている。

(5) a. *Why is it that ...?* は、もっぱら疑問を疑問とした、純粹な問いかけであって、“詰問的な色彩”を帯びず、いわば、“理知的な問いかけ”である。

b. *How is it that ...?* は、感情的な問いかけであって、詰問的な色彩を帯びることが多い。

たしかに、*How is it* 疑問文が「詰問的な色彩を帯びることが多い」ことは、事実の部分的観察としては認められる。しかし、*Why is it* 疑問文が「詰問的な色彩を帯びない」という説明は、次例が示すように事実を正しく反映していない。(6)では、下線部の語句の意味から *Why is it* 疑問文が詰問や焦燥という感情的含意を伴って発話されていることが明らかである。

(6) a. “*Why is it* I never manage to get what I ask for in your shop?” demanded the woman. A smile on her face, the clerk calmly replied, “Perhaps it’s because we’re too polite.”-*Reader’s Digest*, Jan. 1994

b. ‘*Why is it* I didn’t need you to tell me that?’ West irritably said. -P. Cornwell, *Hornet’s Nest*

また、「理知的」「感情的」な問いかけという規定も解釈に幅を残すものであり、そもそもこれらの疑問文のどこからそうした含意が生じるのかという本質的な問題については考察されていない。構造的側面に関して、安藤(1969)では、「‘It is...that’の強意形式によって、howあるいはwhyを浮き彫りにした構造である」、「whyの持つ疑問の気持ちをずっと浮き彫りにし、それにスポットライトを当てた形式」と説明されている。渡辺(1976;1987)もこの見解を引き継ぎ、*Why is it that you are here?* は *Why are you here?* の強意表現であると述べている。たしかに、疑問文の中心

的要素である以上、疑問詞自体が強調を受けることはできる。実際、疑問詞に強調を与える言語形式として(7)の虚辞要素や強意詞が存在する。

- (7) a. {Why/How} {*on earth/in heaven/(in) the hell/the blazes/in the world/in God's name*} + *op, etc.* -Quirk *et al.* (1985:1418)  
b. *Why ever* should she apply for such a post? -*ibid.*, p.451  
c. *How ever* did you find the key? -*ibid.*, p.817

しかし、問題の疑問文に *why*、*how* の強調の意味があるかは不明であり、本稿で明らかにされる多様な意味や用法を考慮に入れると *Why/How is it* 疑問文の存在理由は疑問詞の強調とは別のところに求めなければならない。一方、安井(1996<sup>2</sup>)では別の見方が示され、次の(8a)は形式主語構文で、「この形式は、*Why is it* と言い、時間をかせぎながら、次に自分の言うべきことを考えるのに都合のよい形式であり、会話では、たいへん便利である」と指摘されている。ただし、同書の別箇所では(8b)が分裂文として記述されており、構造的側面が不安定な同定を受けていることがわかる。

- (8) a. *Why is it that* he did not mention the name before?  
b. *Why is it that* Mary is not happy?

安井(1996<sup>2</sup>)の指摘は、*why is it* 疑問文の使用に関する重要な一面を記述したものと言えよう。実際に、*Why is it* と *that* 補文の間には音調上の休止や(9a)のような語句の挿入が認められるし、(9b)は *it* の直後に副詞句が介在したため、続く命題が疑問文の語順をとって発話されている。

- (9) a. *How is it, then, that* Love Affair doesn't work in 1994?  
Probably because it's been postmodernized. -*TIME*, Oct. 24, 1994  
b. "*Why is it* in a nation where prosperity is paramount, and where we have very low unemployment in Massachusetts, do we continue to have a high level of hunger?" Why the paradox?" asked Dr.

しかしながら、本稿における諸例が示すように、問題の疑問文が習慣的、反復的な事柄には用いられるが、知覚したばかりの事柄には使用されないという事実や、「話し手が言うべきことを考えるために時間をかせぐ」とは見なしがたい例も存在する。また、Why/How is it 疑問文は口語に限らず、論文や記事等でも頻用される。

- (10) Our principles allow us to understand *why it is that* (24) Let's go there right away. is acceptable, (25) Let's come there right away. is not acceptable, whereas (26) Let's come right back. is acceptable. -Fillmore(1972)

このように、問題の疑問文の広く多様な用法から基本的特性を抽出する立場に立つとき、安井(1996<sup>2</sup>)の見解は語用論的效果の現われのひとつを記述したものと考えることができる。本稿では、Why/How is it 疑問文の基本的な機能は、that 補文に取り上げた事象が既定であることを表すことにあると考える。様々な語用論的效果は、話し手が発話に先立って定まった事柄であることを積極的に表すことから派生的に生じると仮定する。<sup>3</sup>

## 2. Why is it / How is it 疑問文の基本的意味特性

実際の用例を観察する前に、Why/How is it 疑問文の基本的意味特性の一般化をひとまず次のように規定しておく。

- (11) Why is it 疑問文:取り上げた事象が既定であることを示し、その事象の原因や理由を問う。

How is it 疑問文:取り上げた事象が既定であることを示し、その事象の事情を問う。

ここで言う「既定」とは、取り上げた命題が発話に先立って成立している

ことを表し、話し手自身がその命題を事実であると信じている必要はない。

- (12) “(...) Will you give it [=the power] to me?” “No.” “Why not?”  
“Because you already have it.” “I don’t feel as if I have it.” “I know.” “Then *how is it that* I have the power?” “How did you get in here?” “I imagined the door opening.” “Yes.”—M. Crichton, *Sphere*

(12)では、*how is it* 疑問文の話し手は、自分に特別な能力があるということを実際として認識してはいない。しかしながら、発話に先立って、相手が *you already have it* と断定し、「私に特別な能力がある」ということを保証している。相手の断定した命題をそのまま既定のものとして受けて、どうしてその命題が定まっているのかと相手に問うているのである。実際に、収集した用例を観察すると、*Why/How is it* 疑問文は取り上げた事柄が既定であることを積極的に表現することから、物事の安定した変わらない状態を保証する様々な言語表現を伴って発話されることが多い。

第一に、反復、習慣、習性、社会的慣習、自然の傾向など、発話に先立って一定事象に普遍的に観察される事柄が疑問の対象として取り上げられる場合がある。次の(13)の各 *that* 補文内には頻度を表す副詞表現が、(14)では過去の習慣を表す *would* が、(15)では *tend to* が現れている。

- (13) a. *Why is it that* guys always want to think they’re the only ones?—M. Crichton, *Disclosure*  
b. *Why was it that* every time woman spoke to him forty points seemed to drop from his IQ?—H. Stein, *The Magic Bullet*  
c. Why can’t a movie be more like a woman? *How is it that* Hollywood films are usually built like Arnold Schwarzenegger – big and burly, with way more muscle power than is needed?—*TIME*, April 10, 1995  
d. *Why is it that* they are frequently unable to maintain their success over time?—*FORTUNE*, Nov. 24, 1997

(14) *Why is it my nose would bleed if I met her without warning in the dark, Peg thought.* - *TriQuarterly* 1992

(15) *Why is it that warmer weather in winter tends to be windier than cooler air in summer?* - *The Chicago Tribune*, April 21, 1998

第二に、条理として定まっている事柄の理由や事情が疑問の対象となる場合がある。既に見た(1b)(9b)や次の(16)がその例であり、互いに二律背反的であるが既に定まっていると認識される事象が取り上げられている。(9b)(16a)では paradox、contradiction と「矛盾」が言明されている。

(16) a. Horne says. "And they didn't even bother to ask *how was it that* civil rights were being expanded while civil liberties were being eroded. Obviously there was a big contradiction there somewhere, and in 1995 we are reaping the bitter fruits of that." - *Los Angeles Times*, Aug. 11, 1995

b. *Why is it that* a woman can see from a distance what a man cannot see close? - T. Hardy, *Return of the Native*

話し手が物事の不条理や矛盾を認めて取り上げ、その原因・理由や事情を問うということは、不服、非難、不審などの感情的含意を表明することにもなる。Why/How is it 疑問文の疑念の対象が聞き手の領域に関わる事柄であれば、矛盾をはらんでいるにもかかわらず現実にその事柄が成立していることを聞き手に確認し、反駁の機会や疑いの余地を与えないという語用論的效果をもたらす場合もある。その結果、問題の疑問文は難詰、詰問としての用法を得ることになる。ただし、不条理や矛盾の理由や事情を問うからといって、必ずしも非難や詰責の含意を伴うとは限らない。次の(17)は、相容れない二つの分野で運送会社が収益を伸ばしたことを「一石二鳥、一挙両得」と換言して取り上げて、その事情を問うている。そこには、経営管理の秘策の教授、教示を請う話し手の姿勢が表れている。同様に、(18)では、当該分野に精通している専門家に教えを請うている。

- (17) “(...) And highly profitable: C.R. England has increased its truck fleet sevenfold in seven years, while revenues per truck are up by one-quarter.” “Great - but *how is it that* your companies manage to kill two birds with one stone?”-*FORTUNE*, March 4, 1996
- (18) So we asked the experts two simple questions: *Why is it that* when the weather turns ugly the roads fall apart? And when will we be delivered from this mess?-*Los Angeles Times*, March 9, 1998

仮定から推論される帰結と矛盾するにもかかわらず、取り上げた事柄が現実  
に成立していることを主張する場合、次例のように Why/How is it 疑問  
文の補文内外に条件節が生起する。

- (19) a. *Why is it if you have everything, you've got to get away from it all?*-*TIME*, Oct. 14, 1996
- b. Can the brain cope with remembering everything? If the brain was meant to remember all our experiences, *how is it that* we forget?-*TIME*, June 2, 1997

学術研究論文における問題の疑問文の多用も確認される。先の(10)がその一例であるが、そこでは対象データがある定まった分布を示していることを聞き手に提示したうえで、提案した諸原則によりその分布理由を原理的に理解することが可能であると論じている。この用法は、既に一定のデータ分布や結果が得られているにもかかわらず、従来明確な理由が与えられてこなかったという含みや、話し手自身による原理、原則、真理の発見、追究といった含意を伴う場合もある。「理知的な問いかけ」という従来の記述は、既に定まっている事柄に敷衍しながら、論理的に真相を追求しようとすることがもたらす語用論的効果のひとつを捉えたものであると考えられる。安藤(1969)で(20)が「理知的な問いかけ」とされるのも、話し手自身に直接関わる事柄を既定のこととして示すことで、主観の排除、第三者

的立場からの論理的、客観的な把握という印象を与えるからであろう。

- (20) *Why is it that we can better bear to part in spirit than in body?*  
-C. Dickens, *The Old Curiosity Shop*

ところで、既定のものとして表現される事柄は、不安定、偶発的、例外的であってはならない。そのため、Why/How is it 疑問文は、錯覚の含意を伴う印象ではなく、認識作用や視覚に基づいた判断を表現すると仮定される。実際、seem、be considered など主観的根拠に基づく判断や、look など外観、外見に基づく判断を明示する言語表現は頻繁に顕現する。しかし、外見はそう見えるが、実は錯覚かもしれないという含みを持ち得る appear の生起例は手元の資料にはひとつもない。<sup>4</sup>

- (21) a. So *how is it that* with all this good news for Perot the prospects for him and his Reform Party seem to be growing dimmer?-*TIME*, July 22, 1996  
b. It's true that almost every child occasionally acts or speaks impulsively, allows his mind to wander, and gets overly revved up. So *why is it that* one child who can't stay seated in class is considered normal while another has a problem?-*Parent Time*  
c. *Why is it that* some people look spectacular in their clothes?  
-*The Chicago Tribune*, April 5, 1998

さて、疑問の対象が既に定まった情報であることを積極的に伝達するということは、自己や知己への問いかけ以外では、ややもすれば聞き手の知識不足、情報の一方的押し付けなどの印象を与える可能性もある。ただし、実際の談話を分析すると、既定性を活用しながら、聞き手には知り難いような情報を既定の如く提供する興味深い用例が確認される。(22)では、Why is it 疑問文が Why 疑問文の直後に生起し、聞き手には知り得ない重要かつ多くの情報量をもつ情報が伝達されている。

(22) It would seem, (...), that the real mystery about Ted Kaczynski would be: *Why* didn't someone, somewhere, get him some help? *Why was it that* - even at an institution as vaunted as Harvard University - no one cared to see that he was sick and getting sicker every day? - *Los Angeles Times*

(22)では、多量の情報をまとめて聞き手に与えるのではなく、まず *Why* 疑問文で予め一般的な疑問を提起し、誰もどこも彼を助けなかったという事の全体像を聞き手に確認させている。続いて、*Why is it* 疑問文を用いて、既定事実つまり最終的に行き着いた事態、帰着として、最も医療設備の整ったハーバード大学でさえも彼を看護しなかったことを挙げ、その帰結に対する理由を問うている。ある事柄の全体像を問題にし、次にその具体的な最終的局面、帰着点を聞き手に示すことで意外感や驚嘆の念を喚起しながら、事態の真相に迫ろうとする印象を与えている。このような *Why is it* 疑問文は、Prince(1978)が指摘する「情報を与える前提を含む分裂文 (information-presupposition it-clefts)」と同様の情報構造を示している。

さて、問題の疑問文が、取り上げた事柄が既定であることを積極的に表明する以上、物事の既定性を表現することが好ましくない、あるいは表現できない場合には用いることはできない。例えば、帰宅を突然告げる生徒にその早退理由を問う場合、帰宅を前から定まっていた予定として表現することは適当でない。そのため、*Why is it* 疑問文は用いられない。

(23) P: "I'm going home."

T: "*Why* are you going home?/\**Why is it that* you're going home?"

同様に、遅刻常習者には *Why is it that* you're late? と問いたただすことはできる。しかし、通常の場合であれば、遅刻した生徒には *Why* are you late? だけが基本的に可能である。

### 3. Why is it 疑問文と How is it 疑問文の相違

本節では、Why is it 疑問文と How is it 疑問文の基本的相違について考察する。安藤(1969)は両者を基本的に同義と捉えたうえで「微妙な意味の違いが感ぜられる」と指摘している。これに対して本稿では、両者は結果として互いに重なる部分もあるが、基本的には異なる意味を表すという見方をする。まず、次のような併用例の存在もその根拠のひとつである。

(24) Mills, like Marxists, also presented an historical account of the transformation of power in American society to explain *how and why it was that* a new power elite had developed in the post-war world. -P. Furlong *et al.*, *Power in Capitalist Society*

また、疑問詞自体の基本的意味から、Why is it 疑問文が用いられるのは、取り上げた事象を直接導く原因・理由の存在が想定される場合である。How is it 疑問文が発せられるのは、取り上げた事象がいくつかの事実の積み重ねや複合により成立していると判断される場合であると考えられる。例えば、「風が吹けば桶屋が儲かる」という事象は、因果関係を直接的に説明し難く、次のような推論過程を経てはじめてその事情や全体像が理解できる。

(25) 風が吹く → 砂埃が目に入る → 盲人が増える → 盲人は三味線を弾く → 猫の皮が必要になり猫の数が減る → 鼠が増える → 鼠が桶をかじる → 桶屋が儲かる

(25)の事柄個々の関連は、共有知識から、因果関係や条件帰結の関係といった直接的な論理関係と関連づけて理解できる。しかし、全体像の理解には論理の連鎖、推論過程を把握する必要がある。How is it 疑問文が用いられるのは、ある事柄の全体的な論理過程を理解しようとする場合である。Why is it 疑問文はむしろ原因・理由という直接の論理関係を問う。つまり、両構文の選択には、ある事象に対する話し手の見込み、態度が反映される。

これと対応して、主節における法助動詞の分布に相違が観察される。

- (26) a. Why {\*will/must/\*can/\*could} it be that ...?  
b. How {\*will/\*must/can/could} it be that ...?

Why is it 疑問文と How is it 疑問文は will の容認可能性に関しては同様であるが、must/can/could については相補分布を示す。<sup>5</sup>

- (27) a. *Why must it be that* you always creep...into my dreams...-Stevie Wonder, *Creepin*  
b. *How can it be that* people can use sport for such ends?-*Los Angeles Times*, June 22, 1998  
c. *How could it be*, then, *that* I did not like her much the better of the two?-C. Dickens, *Great Expectations*

まず、両疑問文の主節には will が共起できないという共通の特性を示す。これまで考察してきたように、両疑問文は、既に定まっている事象の成立の理由や論理的過程を問うている。したがって、推論や演繹に基づいた断定ではなく、話し手の主観的な予測を表す will は論理を介さないため共起し得ないことになる。次に、Declerck(1991)が指摘するように、must は「考えられうる唯一の結論は～である」と推論に基づく強い断定を表す。

- (28) If we can go by these instructions, the treasure {*should/\*must*} be buried under that tree. But I still my doubts. -Declerck(1991)

そのため、直接の原因や理由といった唯一的な論理関係を問わない How is it 疑問文は、must となじまないと考えられる。そして、法助動詞 can/could は論理的可能性を表すことから、ある事柄が論理的にどのような過程を経て成立したかを問うことは問題ない。このため、can/could は論理過程を問う How is it 疑問文とは共起する。しかし、Why is it 疑問文の発問者

は、ある事柄の背後に原因・理由という具体的な論理関係を想定しているため、あらためてどのような論理的な可能性があるかを問うことはできない。それゆえ、can/could は Why is it 疑問文の主節に表れることはできないと考えられる。

#### 4. 基本的意味と構造の対応

ここまで、Why/How is it 疑問文の基本的意味は、取り上げた事象が既定であることを示し、その事象の原因・理由、事情を問うことであると仮定してきた。基本的な意味をこのように捉えることで、その多様な用法や語用論的效果を統一的に説明できることを実証的に考察してきた。では、その既定性という基本的意味は、これらの疑問文構造のどこから生じるのであろうか。従来の研究では、Why/How is it 疑問文の構造は分裂文、あるいは形式主語構文と関連づけられて論じられてきた。しかしながら、その根拠は意味的にも、統語的にも不明確なものであった。本稿では、問題の疑問文の既定性は代名詞 it から生じるという立場をとる。<sup>6</sup>まず、次のような口語表現に表れる it に着目されたい。

- (29) a. You can have one more cookie and then *that's it!*-LDCE<sup>3</sup>  
b. Well, *that's it*, we've finished – we can go home now.-CIDE  
c. “*That's it?* That's the whole history?” “That's the whole history. (...)”-M. Crichton, *Airframe*  
d. *That's more like it*, you're getting into the swing of things now.-COBUILD<sup>2</sup>

It は、基本的に既に定まった事柄、つまり物事の帰結を指示する。この既定性から、上例の *That's it* はある事柄が帰結、結末であることを伝え、*That's more like it* はある事柄が帰結、終結に近づいていることを表す。物事の行き着く帰結、落ち着く結末は安定した事象となることから、it はある物事の真相、本来の姿を表すことにもなる。疑問文 *Is that it?* は、ある事柄が定まっているか、つまり帰結や結末にあるかを問うている。ま

た、Why/How is that it? は、ある事柄が成立していることの原因・理由や事情を尋ねることになる。次に、問いの対象となる事柄を that 補文に具体化して、文末に移動すれば Why/How is it 疑問文の形式が得られると考えられる。このように、Why/How is it 疑問文は that 補文に取り上げた事柄が帰結として成立しているのはなぜか、安定した状態にあるのはどうしてかと問う。換言すれば、that 節で取り上げたある事象が、既に定まった「状態」を指す it であると捉えることから、既定性が生じると考えてよい。これと対照的に、ある事柄が帰結となったり、安定した状態に至る「過程」に焦点をあて、疑問の対象とすることで、結果的に Why/How is it 疑問文と同種の用法や語用論的效果を得る疑問文が存在する。次に示す How come に導かれる疑問文（以下、How come 疑問文）は、Why/How is it 疑問文の用法や談話機能と重なり合う部分が多い。(30a-b)は詰問、(30c)は教示の含意を、(30d-e)は帰結提示の働きを示す用例である。

- (30) a. “*How come* you didn’t answer your phone last night?” Chet demanded. -R. Cook, *Contagion*
- b. Like a prosecuting attorney, he kept asking his aides: “Are you sure we were attacked? *How come* they were such bad shots?” -*TIME*, Jan. 1, 1965
- c. “So *how come* they are so much richer than the rest of us? We went together to their offices and asked them to teach us their secrets.” -*TIME*, March 9, 1998
- d. If she spent five years in Paris, *how come* she can’t speak a word of French? -*OALD*<sup>5</sup>
- e. So *how come* (=why is it that) you got an invitation and not me? -*CIDE*

*CIDE* では(30e)の如く、書き換えとして Why is it 疑問文が与えられている。両者は用法が部分的に重なることは事実であるが、形式が異なる以上、基本的意味が全く同義と考えるのは適当でない。そもそも、come は come

down/untied「平熱に戻る/ほどける」のように安定した状態、本来の状態、落ち着いた状態に変化することを表現する。これにより、How come 疑問文は取り上げた事象が安定した状態、帰結に至る「過程」を基本的に問うことになる。つまり、本稿で論じてきた Why/How is it 疑問文が既に定まっている帰結、帰着を問題にしているのに対して、How come 疑問文は取り上げた事象の発端から帰結に至る過程を問うている。<sup>7</sup> Why/How is it 疑問文と How come 疑問文は、結果的には同じ事象を違った角度から捉えているようにも見えるが、後者は主節に一定の法助動詞を伴うことができないなど、各々の基本的意味に基づいた形式であると考えられる。<sup>8</sup>

## 5. まとめ

本稿では、Why/How is it 疑問文の意味と談話機能を実証的に考察し、それぞれの基本的意味から多様な語用論的含意が派生的に生じることや、主節における法助動詞の分布が相違を示すことを統一的に説明した。さらに、同種の用法・機能をもつ How come 疑問文との比較から、Why/How is it 疑問文の表す既定性が、構文上どこから保証されるのかを具体的な用例を観察しながら明らかにした。

## 注

\* 本稿をまとめるにあたり、有益な御助言をいただいた安井泉先生に心から感謝の意を表したい。

1 Why/How is it に続く補文標識 that はしばしば消去される。特に、補文が否定を受けている場合(=6)や、if 節が後続する場合(=19a)に that が省略がされやすい。また、(1)(27b)のように補文内に so/such がよく生起することもこれらの疑問文の特徴である。

2 Why の特性を詳細に論じた研究に八木(1998)がある。様々な角度から、Why に関する興味深い言語事実が明らかにされているが、本稿で扱う Why/How is it 疑問文については取り上げられていない。

3 これと並行的な文法現象が日本語にも観察される。日本語の「なぜ」「どうして」で始まる疑問文は他の疑問詞疑問文とは異なり、「のか、ので

すか」を伴うことが多いという事実が、田野村(1990)、野田(1997)で指摘されている。「のか、のですか」の「の」が既定情報をマークする補文標識として働くと仮定するならば、日本語では原因・理由、事情を問うほとんどの場合、取り上げた事柄が既定であることを聞き手に表示していることになる。一方、英語ではある種の語用論的効果を積極的に意図する場合に Why/How is it 疑問文が選択されることになるろう。

4 seem, look, appear の相違については小西(1976;1985)を参照のこと。

5 こうした法助動詞の分布は、Why/How is it 疑問文が、分裂文や It is that 構文と直ちには結びつかないことを示唆する。理由の because 節を焦点とする分裂文は、(ia)のように前提節と焦点節の関連づけは主観によるものでも、論理によるものでも問題がない。また、主観ではなく推論に基づいた解釈を与える(ib)の It is that 構文は will とは共起しない。詳しくは、大竹(1996)、Otake(1998)を参照のこと。

(i) a. It {will/must/\*can/\*could} be because they are helpful  
that he likes them.

b. It {\*will/must/can/could} be that I am not pretty enough.

6 It の既定性に関しては、Bolinger(1977)第4章を参照のこと。

7 Bolinger(1977)は How come? と Why? を対比させ、How come? の疑問の対象は確定済みの事柄でなければならないという事実を指摘している。

(ii) a. A: You should help me. B: Why? /How come?

b. A: Help me! B: Why? /\*How come?

Bolinger は、how come は元来 how comes it that であったと仮定し、上例で How come? が容認されないのは、消滅した it が確定済みの事柄を指示するという特性に由来すると説明している。こうした仮定が正しかったとしても、it が言語の経済性により消滅した以上、How come? の既定性は現存する come が保証していると考えるのが妥当であろう。

8 Why/How is it 疑問文は、取り上げた事柄が既定、つまり結果として落ち着いた状態である理由や事情を問うて、物事の全体像、全面を明らかにしようとしている。How come 疑問文は、どうして取り上げた事柄に事態が行き着くのかと、物事の結果的、最終的な位置から全体像を見渡し

ている。こうした見方に立てば、従来、虚辞とされてきた(7)の *in the world/on earth* も、世界的、地球的視野で事の全体、全面を捉えようとしているし、「なぜ」「どうして」と共起しやすい日本語の「一体(全体)」なども物事の全面から理由や実情を理解しようとし手が意識していることがわかる。また、*hell/heaven* などは物事を全体的に見渡すという含意に加え、語彙自体に話し手の感情、価値判断が表れている。

#### 参考文献

- 安藤貞雄. 1969. 『英語語法研究』 研究社出版.
- Bolinger, D. 1977. *Meaning and Form*. Longman.
- Declerck, R. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Kaitakusha.
- Fillmore, G. J. 1972. "How to Know Whether You Are Coming or Going." *Studies in Descriptive and Applied Linguistics* 5, 3-17. ICU.
- 小西友七. 1976. 『英語シノニムの語法』 研究社出版.
- 小西友七(編). 1985. 『英語基本動詞辞典』 研究社出版.
- 野田春美. 1997. 『「の(だ)」の機能』 くろしお出版.
- 大竹芳夫. 1996. 「It is that 構文の構造-分裂文説の批判的検証を中心として-」『言語文化論集』第42号. 145-165. 筑波大学.
- Otake, Y. 1998. "Some Constraints on Modal Auxiliaries in the *It is that*-Construction." *Journal of Faculty of Education* 95, Shinshu Univ.
- Prince, E. F. 1978. "A Comparison of Wh-Clefts and It-Clefts in Discourse." *Language* 54, 883-906.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman.
- 田野村忠温. 1990. 『現代日本語の文法 I』 和泉書院.
- 渡辺登士(編). 1987. 『英語語法活用大辞典』 大修館書店.
- 渡辺登士他(編). 1976. 『続・英語語法大事典』 大修館書店.
- 八木克正. 1998. 「Why の特性(上)、(中)」『英語青年』第144巻 第4-5号. 研究社出版.

安井稔. 1996<sup>2</sup>. 『英文法総覧』 開拓社.